

母性原理と父性原理の考察

—日本の将来像を求めて—

01K067 田 辺 祐 介

序論

子供の頃に何気なく見ていたテレビアニメ「ドラえもん」をある金曜日に久しぶりに見た僕は、自分の幼少時に見た印象とは違う印象を受けた。というよりは、幼い頃には気付かなかったことで、ドラえもんは、のび太少年が悪いことをしたとしても呆れるだけで怒ろうとはしないのだ。

「しょうがないなあ、のび太君は…。」

と言って許してしまい、のび太少年が起こしてしまったトラブルや失敗はドラえもんが全て解決してしまう。そうなると、のび太少年は、

「ねえドラえもん助けてよお。」

と甘えることしかしない。

この「ドラえもん」のお決まりのストーリーを幼い頃から見ている、現代の子供達も「ドラえもん」を見てすくすくと育っている。

日本は母性原理社会だということを何かで聞いたことがあった。ならば、母性があるのに「父性」はどこにあるのだろうか。母子家庭の中で育った僕は父性というものを詳しく知りたいと思った。

先ほどの母性原理社会の日本の中から父性が薄れてきているようだ。学校というシステムの中でも、父性を出す行為は保護者などからものすごくパッシングされるため、問題解決の方法としては母性で対応するようだし、学校だけでなく、日本の行政も、マスコミも、全て母性しか出してないようである。ということは現代の子供達は父性を経験していないため、父性的に対応されるすぐにキレてしまうのかもしれない。母性と父性についてももう少し詳しく調べてみようと思った。

母性原理と父性原理を調べていくことによって日本の将来像が浮かんでくるように思えたからである。

第1章 「母性」と「父性」

1節 「母性」について

「母性」という言葉が日本が用いられたのは大正時代初期からであり、この言葉はスウェーデン語、英語でいえばmotherhood、maternityにあたる言葉として登場し、定着したのは昭和期に入ってからのことらしい。「母性」という言葉は頻繁に用いられるが、はっきりとした定義があるわけではなく、広辞苑には、「母性とは女性が母として持っている性質。また、母たるもの」とされている。しかし、これらの記述には具体的に女性の状態・特質の何を持って母性とするかは全く明らかにされていない。「母性とは本能である」と言われても、あまりピンとこない⁽¹⁾。

「母性」という言葉が、研究上の概念としての地位を占めているのは、医学分野およびその近接領域であり、これらの分野領域ではこう捉えられている。「母性」とは「子供を産み育てるために備わった特性(特殊な能力)のことであるが、さらにはかかる特性を持った者の総称」である。広義には女性の性と同義的に解釈されているが、狭義には妊娠・分娩・産褥期の女性を対象としてとくに子を産み、哺乳し得る能力を持つ女性の身体的特徴、およびその状態を意味していると考えられる。

近年では広義の概念が採用される傾向がある。1965年の母子保健法の制定を受け、翌1966年に公示された厚生省の実地要領は、おおむね思春期から更年期にわたる年齢層を母性保健の対象とする方向を示している。妊娠・分娩・産褥期の一時期に限らず、母であり、母となり得る可能性をもつ全期間におよんで母性を捉え、その保険衛生を指導する視点が打ち出されたのである。しかし、この広義の概念の採用により、母性概念は医学概念を超えた価値観を含有する方向へと拡大されていったと見ることができ、例をあげると次のようなものである。

「女性が、成長するにつれて女性らしくなり、女性として成熟し、結婚し、出産して母となる。みずからの子を育て終えて、さらに孫の世話をする。女性の一生は母になること、母であることに終始しているといえよう。母となることは、女性だけの持つ特権であり、男性がこれにかかわることはできない。このように、女性が生まれながらに有する母としての天分を総称して『母性』という。」

母性の定義は、医学的な分野だけにとどまらず、子供への愛情面に関する価値的解釈が混在しているのを見ることができ、母性に関しては、女性独自の生殖能力を指すものから一般常識的な価値観を内在させるものまで、母性概念は多義的に用いられているようである。

2 節 「父性」について

「父性」の起源は、男と女が結婚し、そこに子供が生まれると、女は母親になり、男は父親と呼ばれる。しかし、赤ちゃんにとって母親の存在と父親の存在はかなり違う。母親と赤ちゃんはすでに10ヶ月以上の関係を持っている。生まれただけの赤ちゃんは、何の疑いもなく母親の乳を飲み、母親の胸に抱かれて静かに眠る。その一方で、父親は新生児をおそるおそる抱き上げたときから、父親になった実感を持つが、新生児にとって男はまだ父親ではない。新生児にとって、自分を保護し、快を与えてくれる存在は、母親一人で十分であり、新生児は母親に依存し、母子一体の世界を作る。そこには父親が介在する余地は全くない。生き物、特に哺乳類の系統を見れば、そこには父親が存在しないケースが多いことに気付く。母子関係は、哺乳類の出現と共に誕生するが父子関係は、はたしていつ誕生するのだろうか。

現在、地球上にはさまざまな形態の家族がある。夫や妻や子供と同居しない社会にも、一夫多妻が行われている社会にも、父親が存在する。人間社会に普遍的な父親という存在は、ヒトがサルから分かれたときに突然出現してきたとは考えにくい。おそらく、父性の萌芽は類人猿の時代に準備され、初期人類が確かなものとして確立したのだろう。日本ではその後、ほとんどの父親達が経済活動に専念し、母子関係が濃密になってゆく。

「本来、父性というものは母子関係を切断し、対等な社会関係を教える存在であるのに、わが国ではその機能を失いつつあり、父性は失われ、母性に飲みこまれつつあるように思われる。それは単純に父親たちが経済活動だけにかまけているためでなく、社会約束として強化され、求められた父親という存在が本来の父性とかけはなれてしまったのかもしれない。」⁽²⁾ こういっ

た「母性」「父性」の原理が、社会状態に表れてくるのは何故だろうか。

第2章 「母性原理社会」と「父性原理社会」

1節 地理からみた母性原理・父性原理社会

地理的な背景からみると、日本は四面を海に囲まれているため、まるで母親の腕の中にいるような安心感のあるような国になり、母性的思考が強くなったので「母性原理社会」とされた。ヨーロッパは国と国同士が隣接しているため、日本のように海が守ってくれないので、力で国を守らなければ母国が減ぶ運命にあったために、このような地勢が父性を尊ぶ思想を、ヨーロッパに芽生えさせることになり、米国もヨーロッパから生まれた国であるからこれらの国は、「父性原理社会」とされる⁽³⁾。

しかし、僕は現在の日本の「母性原理社会」に違和感を感じる。それはなぜなら「巨人の星」の星一徹などの「頑固親父」とよばれる父親像があったからであり、この「頑固親父」が父性そのものではないのだろうかと思うからだ。そういった「父性」が現在の社会からうすれていった要因を、僕らの経験したことのない戦争が関係していると思った。

2節 戦中の日本は父性原理社会だった？

戦時中、日本は軍国主義国家だった。なんとなくのイメージだけが頭の中にある状態で僕は「軍国主義」というものを詳しく知らなかった。広辞苑によると「国の政治・経済・法律・教育などの政策・組織を戦争のために準備し、軍事力による対外発展を重視し、戦争で国威を高めようとする立場。ミリタリズム」⁽⁴⁾とされている。第二次世界大戦当時の日本は、政治が軍事の道具となり、軍事作戦が軍の威信や権威を根拠に立案されていた。

地理的には母性原理国家である日本も戦時中の当時は、戦うことが中心だったため、父性原理国家であったといっても過言ではないだろう。敗戦後、日本のシステムはアメリカ合衆国の介入により、変わった。まさに、ここで日本の「父性」は消えてなくなってしまったのかもしれない。

戦時中の父性原理国家、日本には「厳しさ」、「ルール」があったと思う。それらを失ってしまったことが今の日本を作ったのかもしれない。軍国主義が素晴らしいとは思わないが、「軍国主義」と聞いただけで全てをマイナスとして、捉えてしまうことは乱暴だと思う。

第3章 母性原理社会、日本

1節 「タテ社会」と「ヨコ社会」

現代の日本人の精神構造は特殊に思える。なぜなら日本という国は、経済的には大成長をしたが、文化的にも、精神的にも、経済に比べると他の文化圏には大分、遅れているからである。

中根千枝の『タテ社会の人間関係』では、日本の社会をタテ社会として特長付け、欧米型のヨコ社会と対比した。職業を聞かれて、「サラリーマンです。」と答える社会はヨコ社会であり、「〇〇社の社員です。」と答える社会はタテ社会。日本では、スペシャリストが才能を売り歩くという雇用形態よりも、一つの会社に定年まで所属して、様々なポジションをこなすという雇用形態の方が多い。この本が出版された当時は、日本は完全なタテ社会だった。タテ社会とは「ウチ」、「ソト」の区別にこだわる家をモデルにしたような社会であろう。

どんな文化も家族というグループは利益のための機能的グループではなく、愛によって作ら

れたグループである。多くの文化では、子供は愛のグループから機能的グループに追いやられ、機能的グループの中で大人になるのに対し、日本は、いつまでも温情主義的な中に留まろうとする。戦前は日本政府が国家という家の中に、天皇という父を作ったが、戦後、国家という家を失った日本人は、会社に家庭的なグループを求めた。そして日本人は、グループ内でしか人間関係を築こうとせず、グループの外に対しては引っ込み思案になってしまうのである。

2節 「恥の文化」と「罪の文化」

ルース・ベネディクトは、『菊と刀』で、恩を着せられることによる義理が、日本人の意識を制約していることを指摘した。こうした原理の優位は日本だけではなく、プリミティブな社会では広く見られる。個体発生と系統発生とを、対応させるなら互酬性社会は、母子の間の水平的な交換条件を機軸とする胸像段階に相当する。この段階は、父というコミュニケーション・メディアによって垂直的に交換が媒介されていないという意味で、プリミティブなのである。『菊と刀』は、日本の文化の違いを「恥の文化」と「罪の文化」の違いとして説明したことで有名である。日本の経営者が「世間をお騒がせして、まことに申し訳ありません」といって辞職するのは日本の「恥の文化」からであり、「罪の文化」の立場からすれば、罪がなければ辞職する必要がないことになるのだが、「恥の文化」からすれば、世間を騒がせた恥が引っ込む口実として認められる。

恥とは、他者の目にうつる醜い自我に対しての不安である。周りの中で自分だけが一人、周りとは異なる時人は恥ずかしいと感じる。恥は、他者との相対的な関係で決まることであり、浮き上がることを恐れる感情である。

これに対し、罪は超越的で普遍的な規範に違反したときの意識である。罪の文化の人は、自分が正しいことをしている確信があれば、周囲から笑われても恥とは思わずに、周囲が無知だと考える。日本人の大半は、神から与えられた規範はないから、主義主張に節操がないときがある。過去に鬼畜米英を唱えていた日本人が一転して親米的になったのを見たマッカーサーは、日本人の精神年齢が12歳だと言ったが、このように罪の文化から見れば、恥の文化は幼児的に見える。アリストテレスも『ニコスマス倫理学』の中で、恥は若年層にふさわしい感情とした。

3節 「甘え」

日本文化の幼児性を「甘え」という言葉で指摘したのが、土居健郎の『甘えの構造』である。もちろん、甘えるという現象は、日本人だけに見られるわけではない。どこの国でも、子供は母親に甘えるものだ。だが、日本では子供がいつまでも親に甘え続けることができるのに対して、多くの国では、子供たちは、父親によって、精神的な乳離れを強要される。では、日本の文化は幼児的な段階に留まっているのだろうか。

それは、日本での母権社会から父権社会への転換である男性革命が不十分であったためではないだろうか。男性革命が、ギリシャ哲学やユダヤ教や仏教や儒教など男性原理に基づく宗教や哲学が誕生した紀元前5世紀頃の「枢軸時代」がピークであるが、そのころの日本は縄文時代であり、当時の日本人はプリミティブな地母神を崇拜していた。

6世紀になると、日本は男性宗教の一つである仏教を輸入するが、当時の日本の為政者たちは、仏教を自分が解説するための宗教としてではなく、現世に対する執着を捨てることのできない怨霊を成仏させる技術として導入した。無念の死を遂げた敗者が、怨霊となってたたりを

なすという怨霊信仰は、日本だけでなく世界中にある。しかし、怨霊を神として崇める伝統があるのは少なくとも先進国では、日本だけである。世界の仏教圏においても、「誰でも死ねば仏になることができる」と信じているのは、日本だけである。

この怨霊崇拜とその仏教的変形も「甘え」で説明できると思う。土居健郎は日本人が「甘えの葛藤の彼岸にある者を神と呼んでいる」と言うが、敗者となっても、怨霊としてたたりをなせば、神あるいは仏として崇めてもらえるとも期待することも甘えの一つである。旧約聖書では、イスラエルの民が出エジプトの後、カナンへ向かう途中、神が邪魔になる住民を大量に殺戮しているが、殺された人々が怨霊となって報復したり、イスラエルの民が鎮魂のために怨霊を神として崇拝するという事はない。それはイスラエルの民にとって、ヤハウェは唯一絶対の神であり、他の神を崇拝するという事は許されないからである。

ユダヤ・キリスト教が父性の宗教だとするならば、日本の伝統宗教は母性の宗教である。母親のような存在が相手なら、幼児は欲求不満の時は泣きじゃくって駄々をこねれば、あやされて慰めてもらえる。だから、日本では怨霊が、「自分を神として崇めてくれ」と駄々をこねているのかもしれない。しかし、父親のような存在に対しては、こうした甘えは許されない。父なる神は、絶対的の超越神であり、人間同士の恩讐の彼方にある。

世界で一番男性的な宗教は、イスラム教に間違いはない。電車の中でイスラムの文化圏から日本に来た夫婦が、妻は手ぶらで座席に座っているのに夫は片手に荷物を持ちながら、もう片方の手で赤ん坊を抱き、立っていたそうだ。それを知った僕は、イスラムの男たちはたくましいなと思った。

外国から来た女性は、日本の男性を評して、「頼りない」「男らしくない」と言うらしい。「男らしくない」という意見に対しては、戦前の日本の怖い父親はどうなるのか、妻に対し威張る亭主関白は父親の威厳があって男らしいじゃないかと思った。しかし、よくよく考えてみると確かに亭主関白は、一見すると偉そうに見えるが、妻から見れば、自分一人では身のまわりの世話が何もできないただの「大きな赤ん坊」にすぎないのかもしれない。

欧米では、夫が妻のために食事を運び、部屋に入る時には自ら扉を開けて妻を先に入れる。こうした「婦人への奉仕」という欧米に伝統的な騎士道精神を見て、「欧米では、女性は尊重されている」と思うかもしれないが実はそうではなくて、「女は男が守らなければ生きていけない弱い存在だ」という男尊女卑の態度の表れである。日本の男にとって、女性は母親的な存在であることに対し欧米の男にとって女性は子供のような存在であるようだ。全く逆である。

4 節 「死の美学」

「日本の男には、欧米の男にはない男らしさがある。太平洋戦争の時、特攻隊に自ら志願するなど、死を恐れずに戦ったのは日本兵であって、米兵は女々しいことに安易に降伏した」という意見もあるだろう。戦前の軍人や江戸時代の武士にとって、「死は鴻毛より堅し」だった。この勇ましさは日本の文化が母性的ではなく、父性的であることを示しているのだろうか。

戦陣訓に「生きて虜囚の辱を受けず」というように戦時中の日本兵は捕虜となるよりも自決を選択した。これに対し、捕虜となったアメリカの兵隊は日本の兵隊に捕虜となったことを祖国の家族に知らせたいと願い出て日本人を驚かせた。アメリカ兵も命をかけて祖国を守ろうとした点では日本兵と変わらなかったが、彼らには家族を守る父親としての責任もあったため、ムダ死にせずに捕虜となることは、ちっとも恥ずかしいことではなかったし、彼らは死を

美しいと思っていなかった。

日本には、いつまでも咲き続ける梅の花よりも、すぐに散ってしまう桜の花を愛する独特の美学がある。桜のように散ってしまった特攻隊員や潔く腹を切った武士達は、そういった「死の美学」に陶醉していたのかもしれないと思う。「花は桜木、人は武士」である。特攻は、今では日本の専売特許ではなくなったが、自爆テロを行うイスラム原理主義者たちは、父なる神アッラーのために死ぬのであって日本人のように死そのものが美しいものとは考えない。精神分析学では、死への欲動を「タナトウス」と名付けているが、日本にはなぜタナトウスの美学があるのか。

人は、死ねば土に帰る。死ぬということは、母なる大地の懐に戻るということを意味している。日本の特攻隊員が死ぬ直前に叫んだ言葉は、「天皇陛下万歳」ではなく、「お母さん」だった。自ら死を選んだ特攻隊員は、その深層心理において胎内回帰願望によって動機付けられていた。このように、一見すると勇ましそうな日本人の死の美学も、実はきわめて幼児的な欲動に基づいているのである。

5 節 歴史から見る日本

韓国の比較文化論者、李御寧は『縮み志向の日本人』の中で、日本文化には縮み志向があることを指摘した。これは日本では土地が不足しているからだと言う意見があるが、日本以上に人口密度が高いところに必ずしも縮み志向の文化があるとは限らないから、日本人が縮み志向であるということは、日本人は大きくなることを拒んでいる。すなわち、大人になることを拒んでいるということであり、日本人の胎内回帰願望の現れなのかもしれない。

日本人は、縮むことだけでなく縮めることも好きである。1980年代に、日本人は欧米人が発明した備品の精巧な小型版を作り世界の市場を圧巻した。李御寧によると、初めて世界的にヒットした日本発の輸入品は折りたたみ式の扇子だったそうだ。だから、先進国の製品を見て、それを縮めて模倣して輸出するという伝統は平安時代からあったことになる。このように日本人は、先進国が作った物のミニチュアを作ることに熱心なのだが、これもまたきわめて幼児的な現象といえる。大人の行動を見た幼児は「…ごっこ」という遊び心で、そのミニチュアを作りたいがるからである。

日本文化が幼児的であるのは、男性革命が不十分だったからだと説明したがなぜ日本では、男性革命が不完全燃焼を起こしてしまったのか。なぜ日本人は超越的な唯一神を信仰しないのか。なぜ日本には強いリーダーや強い父親が現れないのか。この疑問に対しては二つの説明ができる。

一つは自然環境説である。一般に、厳しい母親のもとで育つと、子供は早く自立するが、母親が甘やかしていると、子供はなかなか乳離れできない。同様にイスラム文化圏のように、母なる大地が砂漠で自分が苛酷なところでは、人々は早い時期に袂を分かち傾向にある。日本のように母なる自然が人間に優しくしてくれる地域では、地母神崇拝からなかなか脱却できない。キリスト教も、もともとイスラム教と同様に砂漠の宗教であり、純粋な男性宗教だったが、豊かな森に恵まれた地域だったので徐々に女性宗教になった。インドネシアもイスラム教を受け入れたが、自然に恵まれていた地域なので、インドネシア人の信仰は、ちょうど日本人の仏教と同様に、表面的なレベルに留まっており、インドネシア人の意識としては相変わらず、原始的で伝統的な信仰が残存している。

言うまでもなく、豊かな自然に恵まれた地域は日本だけではないから、自然環境説は、日本の文化を説明するのは不十分である。そこで隷属経験説を提示しようと思う。

幼児的な民族は、嫉妬深くしてリーダーシップを発揮する強い権力者を指導者として仰ぎたがらない。しかし、それでも戦争ともなると強いリーダーが必要となる。戦争に負けて、民族全体が異民族の奴隷となる悲惨な体験をした民族は、幼児的な嫉妬心を捨てて強いリーダーを望むようになる。イスラエルの民が世界初の男性宗教であるユダヤ教を信じたのは、彼らがエジプトの圧政やバビロン捕囚といった民族隷従の苦しみを味わったからである。

では、日本民族はどうだろうか。日本列島は、まるで羊水に守られている胎児のように、周囲を海で囲まれており、地理的に異民族の侵入を受けにくい位置にある。日本民族が異民族に支配されそうになった時は、白村江の戦いに敗れた後、蒙古襲来時、鎖国時代末期、太平洋戦争敗戦後の過去4回しかない。そして、いずれの時も運命は日本人に優しくしてくれた。

663年に、白村江で唐・新羅の連合軍に敗れた日本は、唐・新羅の連合軍に攻められる危機に直面した。天智天皇(中大兄皇子)は、侵略に備えて近江大津京に遷都し、西日本各地に城を築いた。だがこのとき、日本にとって幸いなことに、朝鮮半島をめぐる唐と新羅が不和となり、日本は侵略される危機を免れた。

1274年と1281年の2回にわたって日本は、元(モンゴル)から攻撃を受けた。モンゴル人は騎馬戦を得意としたが海戦には弱かった。1281年の本格的な侵攻の時も、よく知られているように「神風」と日本人が呼ぶことになる大暴風雨により、フビライ・ハンの野望は鷹島沖の藻屑となって消えてしまった。

江戸時代末期、日本は他のアジア諸国と同様に欧米列強の植民地となる危機に晒された。だが、イギリスやフランスは地理的に極めて遠い日本を植民地化することに熱心ではなく、日本との通商に熱心なアメリカも日米修好通商条約の締結に成功したものの3年後に起きた南北戦争で日本どころではなくなり、ロシアも日本を植民地化できるほどシベリア開拓を進めていなかった。こうした幸運に恵まれた日本は独立を保つことができた。

第二次世界大戦に敗れた時、日本は、ドイツとは異なって自民族による政府を存続させることが出来た。戦争中には神風は吹かなかったが戦後、冷戦という日本にとってはありがたい神風が吹いてくれた。おかげでアメリカは、日本を反共の砦にするべく、惜しみなく日本に物資を援助してくれた。日本にとってアメリカの占領軍は、搾取する侵略者ではなくて慈悲深い母親のような存在だったわけで、今日に至るまで日本はアメリカから乳離れができなくなっている。

「運命の女神」という言葉から、運命は女性として表象される。父性文化が成熟している国の民族は、運命という女を力で征服し、自分の支配下に置こうとする。ところが、日本人は運命という偉大な母に幼児のように、おすがりして身を委ねようとする。これまでそれで上手くいったのだからこれからも運命という母に甘え続けようというわけである。「北朝鮮が攻めてくるかもしれない」と言われても「いざとなればアメリカ軍が何とかしてくれるだろう」と相変わらず神風が吹いてくれることを期待して、のほほんとしているのはこのためである。

歴史から見た日本は「幼児的」に思えた。しかし、幼児的であることは、必ずしも悪い事ばかりではない。世界に冠たる小型製品や世界的に高く評価されているアニメ映画を作り出すことができるのは、幼児性のおかげである。しかし、政治や外交や安全保障の分野で幼児的であることは致命的な短所であり、日本は経済では一流だが、政治では二流三流といわれている。

政治や外交や安全保障の分野でも一流であろうとするなら、日本人はもっと大人にならなければいけないだろう。

第4章 現在の日本社会の混乱

1節 二つの倫理感

現在日本の社会状況の多くの混乱は、父性的な倫理観と母性的な倫理観の相克のなかで、一般の人々がそのいずれに準拠してよいか判断が下せぬこと、また、混乱の原因を他に求めるために問題の本質が見失われることによるところが大きいと考えられる。

このため、現在の日本は「長」と名のつくものの受難の時代であると言え言えることができる。つまり、長たるものが自信をもって準拠すべき枠組をもたぬために「下からのツキアゲ」に対して対処する方法が解らず、困惑してしまうのである。

母性原理に基づく倫理観は、母の膝という場の中に存在する子供たちの絶対的平等に価値をおくものである。それは換言すれば、与えられた「場」の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えるものである。これを「場の倫理」とでも名づけるならば、父性原理に基づくものは「個の倫理」と呼ぶべきであろう。それは、個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるものである。

たとえば交通事故の場合を例として考えてみたい。ここで、加害者が自分の非を認め、見舞にゆくと、二人の間に「場」が形成され、被害者としてはその場の平衡状態をあまりにも危くするような補償金など要求できなくなる。ここで金を要求すると、加害者の方が「あれほど非を認めてあやまっているのに、金まで要求しやがる」と怒るときさえある。この感情はわれわれ日本人としては納得できるが、西洋人には絶対理解できない。非を認めたかぎり、それに相応する罰金を払う責任を加害者は負わねばならないし、被害者は正当な権利を主張できる。ところが、場の倫理では、責任が全体にかかってくるので、被害者もその責任の一端を荷なうことが必要となるのである。日本人の無責任性がよく問題とされるが、それは個人の責任と場の責任が混同されたり、すりかえられたりするところから生じるものと思われる。

ところで、事故の場合、加害者が言い逃れをしたりすると、これは被害者と同一の「場」にいないものと判断し、徹底的に責任の追及ができることになっている。つまり、わが国においては、場に属するか否かがすべてについて決定的な要因となるのである。場の中に「いれてもらっている」かぎり、善悪の判断を越えてまで救済の手が差しのべられるが、場の外にいるものは「赤の他人」であり、それに対しては何をしても構わないのである。

ここで善悪の判断を越えてという表現を用いてしまったが、実のところ、場の倫理の根本は、場に属するか否かが倫理的判断の基礎になっているのだから、その上、ここで善悪の判断などといっても、それは判断基準が異なるのだから論外である。

場のなかにおいては、すべての区別があいまいにされ、すべて同様の灰色になるのであるが、場の内と外とは白と黒のはっきりとした対立を示す。日本人の心性を論じる際に、そのあいまいさに特徴を見出す人と、逆に極端から極端に走る傾向を指摘する人があって、矛盾した感じを与えるが、これは上述のような観点によるとよく理解されるのではないだろうか。

場の内外の対比は余りにも判然としており、そこに敵対感情が働くと絶対的な対立となり、少しの妥協も悪と見なされる。ところが、場の内においては、妥協以前の一体感が成立しており、言語化し難い感情的結合によって、すべてのことがあいまいに一様になってくるのである。

交通事故の例をあげたが、現在のわが国では、さまざまな局面でふたつの倫理観がいきまじり、いろいろな混乱をまき起こしていると言えないだろうか。このような混乱を助長するもうひとつの要因として、次のようなことが考えられる。場の平衡状態を保つ方策として、場の中の成員に完全な順序づけを行うことが考えられる。つまり、場全体としての意志決定が行われるとき、個々の成員がその欲求を述べたてると場の平衡が保てぬので、順序の上のものから発言することによって、それを避けようとするのである。

ここで大切なことは、この順序の確立は、あくまで場の平衡状態の維持の原則から生じたもので、個人の権力や能力によって生じたものではないということである。このような特殊な状態を社会構造としてみると、「タテ社会」の人間関係となることは、中根千枝氏が既に見事に説明している。これについては何らつけ加えることはないが、時に学生たちと話合っていると、「タテ社会」という用語を彼らがしばしば誤って使用していることに気づく。つまり、彼らは「タテ社会」という用語を、権力による上からの支配構造のような意味で用いるのである。これはまったく誤解である。

タテ社会においては、下位のものゝ上位のものゝ意見に従わねばならない。しかも、それは下位の成員の個人的欲求や、合理的判断をおさえる形でなされるので、下位のものゝそれを権力者による抑圧と取りがちである。ところが、上位のものは場全体の平衡状態の維持という責任上、そのような決定を下していることが多く、彼自身でさえ自分の欲求を抑えねばならぬことが多いのである。

このためまことに奇妙なことであるが、日本では全員が被害者意識に苦しむことになる。下位のものゝ上位のものゝの権力による被害を嘆き、上位のものは、下位の若者達の自己中心性を嘆き、共に被害者意識を強くするが、実のところは、日本ではすべてのものが場の力の被害者なのである。この非個人的な場が加害者であることに気がつかず、お互いが誰かを加害者に見たてようと押しつけ合いを演じているのが現状であるといえるだろう。

場の構造を権力構造としてとらえた人は、それに反逆するために、その集団を脱け出して新しい集団をつくる。彼らの主観に従えば、それは反権力、あるいは自由を求める集団である。ところが既述のような認識に立っていないため、彼らの集団もまた日本的な場をつくることになる。そして、既存の集団に対抗する必要上、その集団の凝集性を高めねばならなくなるので、その「場」の圧力は既存の集団より強力にならざるを得ない。このため「革新」を目指す集団の集団構造が極めて保守的な日本的構造をもたざるを得なくなったり、大企業のタテ社会を批判して飛び出した人が、ワンマン経営の小会社という強力なタテ社会を作りあげたりする矛盾が生じてくるのである。

あるいは若者の要求にしても、絶対的平等観という母性原理をもとにして、個の権利を主張するという父性原理を混入してくるので、なかなか始末に負えなくなるのである。場の倫理によるときは、場にいられてもらうために、おまかせする態度を必要とするし、個の倫理に従うときは個人の責任とか契約を守るとかの態度を身につけていなければならない。ところが、ふたつの倫理観の間を縫うようなあり方には、まったく対処の方法が考えられないのである。

2節 若者をめぐる問題

現代の日本の混乱を如実に示している例をいくつかあげようと思う。それは青少年の指導を行っている人の話であるが、シンナーの吸引をしていた少年達に、その体験を聞いてみると、

彼らは一様に観音さまの幻覚を見、その幻覚のなかでの、何とも言えぬ仲間としての一体感に陶酔していたという。つまり、社会から禁じられているシンナー遊びをする点においては、反社会的、あるいは反体制的とも言えようが、求めている体験の本質は母性への回帰であり、わが国の文化・社会を古くから支えている原理そのものなのである。

これに類することは処々に見られ、これらの反体制の試みが簡単に挫折する一因ともなっている。このようなことが生じるのは、結局は日本人がなかなか母性原理から脱け出せず、父性原理に基づく自我を確立し得ていないためと考えられる。

また精神科医の話では、登校拒否、家庭内暴力、摂食障害の子供が増えている、その原因というのは父親が父親として働く姿を子供に見せることができないことにあると言う。それが父性の喪失につながっていき、伝統的秩序は崩壊し、価値観の変化を生じ、退行し、不安、攻撃などの心の問題を生じた。さらに戦後の女性の社会進出もあって父親が仕事、母親が家庭という構造が崩れて女性だけでの育児が可能な環境が整備されつつある現代の中ではますます父性が発達しにくくなってしまった。

内外の厳しい状況の中で、個々の男性は新しい父親像を見つけなければならないし、女性も新しき母親像を確立する必要がある。なぜなら子供は母親を通じて父性行動を知ることもあり、父性と母性は表裏一体であるからだ。子供の心の病が少しでも良くなるためには「見える父親」が必要なのかもしれない。

結論

これまで母性原理と父性原理の関係を考察してきたが、そこから浮かんできた日本の将来像は、大人のいない国、つまり、ピーターパンのネバーランドである。ネバーランドは子供だけの国であるが、日本もこの先ほとんどの人が大人の格好をしていても中身は子供といった人間になってしまうのではないだろうか。

最近、テレビのニュースを見ると家庭内暴力や幼児虐待のニュースがとても増えたように感じる。それは、子供のまま親になってしまう人が増えたからだと思う。親としての責任を果たせないばかりか子供を傷つけて殺してしまうという事実に対して虐待は親から子に受け継がれるものという見方がある。確かに虐待によって子供を殺してしまった親自身が親から虐待を受けていたケースは多いかもしれない、しかしそうだとしたら虐待はこの先なくなるし、虐待を受けた人は子供を育てることなどできないということになる。虐待事件を起こした親の年齢の低さを見るとほとんどが未成年であったり未成年に近い年齢だということは、親自身が親になりきれない状態で子供を産んでいるということなのかもしれない。だとすれば、それを許すところにも問題があるのではないのかと問いたい。

どんなものにも長所と短所があるものだが「母性」は全てを抱きかかえて育てると同時に、全てを飲み込み死に追いやってしまうという二面性を常に持っているように思える。長所と短所、ポジティブな面とネガティブな面は同じものの二つの側面、裏表の関係である。だから、調和が保たれている時にはポジティブな形で表現され、調和が乱れるとネガティブな形で表現される。

短所や欠点は、何か欠けていて埋め合わせなければならないものではなく、それを受け入れて自分の中で調和させることによって長所へと転換されるものだと思う。

最後に自分の意見を述べたいと思う。僕はこれからの日本の社会に必要とされているのは、

「バランス」だと思う。現在、調和の乱れている母性原理はネガティブなものとして捉えられているだろう。それならば、父性原理を求めていこうという意見にも賛成はできないだろう。残念ながら、父性原理国家も調和がとれていないネガティブなものであるからだ。

父性原理の調和の乱れによって現代に起きている問題も多くあるであろう。悲惨であった9・11がイラク戦争を起こし、フセイン政権の終わりと共に戦争が終わったかのように思えた現在でもイラクの中では悲惨なテロが頻繁に起こっているのは、すべて父性原理の調和の乱れが引き起こしたのではないだろうか。

「父性」とは規範・ルール番人のような存在であって、ルールを守れない者を厳しく罰する存在であると思う。僕の視点では、強くなりすぎたアメリカ自身が世界の番人になろうとして国連で定められているルールを犯してしまっているように思えるし、イスラム原理主義のテロ組織も自分自身の祭り上げた神のルールを別の解釈で処罰と称したむごたらしい殺人を行っているだけにしか見えない。人間は神ではない、だから神の行動に感謝し崇拝することはあっても、神に代わって行動するのはルール違反であるように感じる。アメリカは、その強力な力という短所を再構築して、調和のとれた力を持つべきである。イスラム原理主義者に対しても同じことをいえるだろう。

調和の乱れたもの同士、武力を使わずにお互いに分かり合い認め合わなければいけないのではないだろうか。

僕は、人間をひとつの動物だとは思わない。性別の違いというものがなくなる以上、男性と女性は同じ種類に属してはいるが、まったく違う存在であると思っている。ただ、お互いに自由であるべきだと思う、そして互いに責任を持つべきだとも思う。だからといってお互いの間の子供に責任感のない自由を与えないでいただきたい。

日本のお父さんは、仕事をして給料をもって家に帰ることで父としての役割を果たしていると思ってはいないだろうか。女性の中には母親と経済活動を両立しはじめているというのに、そんな女性に負荷をかけている「女々しき」男性は、もっと懐を広く持ち、互いに支えあうことができれば、その姿を見て育った子供達は、登校拒否を起こすこともなく、引き籠もることもなければ成人式で馬鹿げた行動をしないとと思うのである。

註

- (1)井上輝子『日本のフェミニズム⑤母性』岩波書店、(1995)。
- (2)日向英実「父親の起源」<http://www10.plala.or.jp/lapita/life/9a.html>
- (3)河合隼雄「日本文化の行方」<http://www.naijyo.or.jp/kouen/20021119.html>
- (4)朝日ネット「軍国主義」<http://www.asahi-net.or.jp/uq9h-mzgc/military.html>

参考文献

- ルース・ベネディクト『菊と刀—日本文化の型』社会思想社会、(1972)。
土居健郎『甘えの構造』弘文堂、(1984)。
河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社、(1997)。
中根千枝『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社、(1977)。

(卒業論文指導教員 延原時行)